高知大学 病院ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長　森信　繁
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長　横山　彰仁

就任のご挨拶

医学部長　**本家 孝一**

本年4月より医学部長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

国立大学は、今年度より第三期中期目標期間（6年間）が始まりました。高知大学は基本的な目標に「現場主義の精神に立脚し、地域との協働を基盤とした安全・安心で持続可能な社会の構築を志向する総合大学として教育研究活動を展開する」と謳っており、教育と研究の重点分野に「医療」と「生命」を挙げています。この目標は、高知大学医学部の基本理念「人間性豊かな良き医療人づくり」と「地域医療に密着した学風づくり」と何ら矛盾するところはなく、これからも「地域特性に根ざした医学・医療の推進に寄与し、国際社会にも貢献しうる優れた医師・医学研究者を養成する」ことは本学の使命でありつづけます。

世界は“不確実性の時代”に突入しています。資本主義経済が行き詰まり、国の政策は威勢の良い掛け声ばかりで、実質経済は悪化しつづけています。わが国は“2025年問題”に象徴される超高齢化社会を迎え、公的医療費の抑制に舵を切りました。今後、病院経営はますます厳しくなると予想されます。

教育に関しても、財政難を理由に国立大学への運営費交付金は年々削減され、将来への投資が停滞しつつあります。もともと、わが国の教育に対する公的投資（対GDP比）はOECD国の中で最低レベルですので、国の政策の中で教育が軽視されているといわざるをえません。

長岡藩大参事の小林虎三郎は「国が興るのも、街が栄えるのも、ことごとく人にある。食えないからこそ、学校を建て、人物を養成するのだ」と至言を遺し、支藩から贈られた米百俵を生活費に回さずに学校設立に充てました。江戸時代は現代よりもっと不確実性の時代であったはずです。当時の長岡藩は戦に敗れ、実収にして6割を失って財政が窮乏していたといいます。私達はもう一度原点に立ち返り、大学の本分が人材育成にあることを再確認したいと思います。

就任のご挨拶

看護学科長　**栗原 幸男**

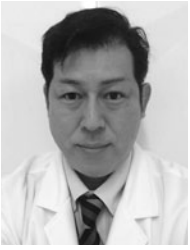
この四月より看護学科七代目の学科長に就任することになりました。どうぞよろしくお願い致します。私が看護学科所属となりましたのは平成18年からですが、看護学科が開設された平成10年から関わって来ましたので、この学科の強みも弱みもよく知っているつもりですが、長く関わって来たため幾分評価が甘いかも知れません。改める所は改め、伸ばすところは伸ばしていければと思っていますので、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

看護学科は医学科と異なり、附属病院がある状況で開設されましたので、附属病院を実習場所としている他の看護学校と同じ立場にあるように思われている方もいらっしゃるかも知れませんが、卒業生の就職状況を見てみますと、毎年約10名が附属病院へ看護師として就職しています。開設以来からですと、約150名が就職したことになり、附属病院へ一定の寄与が出来ているのではと思います。今後できれば、医学科卒業生と同じ程度に1年次入学生の三割程度が附属病院へ就職してくれればと願っています。そのためには看護学科と附属病院との連携を強め、附属病院をホームホスピタルと学生が感じられる状況になることが必要と考えています。附属病院の皆様からのさらなるご支援をお願いする次第です。

今、高知大学では「地域協働」を強く打ち出しています。看護学科も高知県の保健・医療に貢献して行く使命があると考えています。附属病院へ就職する看護師と合わせると、毎年四割前後の卒業生が地域医療機関での看護師や地域自治体の保健師等として、高知県内に残ってくれています。できれば、この割合も今後五割、六割と増やして行きたいと思います。そのためには、地域医療機関、地域自治体との協力関係を強めることが必要と考えています。幸い関係する機関の方々が看護学科に対して大変好意的ですので、様々な形で協働の取り組みを行い、学生に高知県の保健・医療に関心を持ってもらえるようにしたいと思っていますので、皆様方のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

就任のご挨拶

泌尿器科学講座 教授　井上 啓史



平成28年4月1日付けで、高知大学医学部泌尿器科学講座教授を拝命致しました。何卒よろしくお願い申し上げます。

私は、高知市出身です。高知医科大学に6期生として入学し、平成元年に卒業後、藤田幸利初代教授が主宰される泌尿器科学教室に入局させて頂きました。大学院に入学後、当時大朏祐治前教授主宰の病理学講座において、降幡睦夫現教授のご指導の下、腫瘍病理学や分子生物学を主とした研究基礎を学ばせて頂きました。平成7年よりは、執印太郎第2代教授のご指導の下、高知大学医学部泌尿器科学教室にて、更なる臨床・研究の修練を積ませて頂き、平成9年よりは、米国テキサス大学 MDアンダーソン癌センターにPost-doctoral Fellowとして留学。癌生物学のIsaiah J Fidler教授および泌尿器科学のColin PN Dinney教授のご指導の下、腫瘍における血管新生メカニズムの解明および抗血管新生治療薬の開発というテーマで研究させて頂き、現在薬事承認されているセツキシマブやラムシルマブなどの前臨床試験に携わることができ貴重な経験となりました。帰国後は、この血管新生の研究テーマに加えて、光線力学に基づく新たな診断法や治療法の開発にも携わり、日本のみならず中東や欧州の研究者とも学術連携を組み研究に従事することができました。臨床においては、より低侵襲な医療技術、特に泌尿器科腹腔鏡手術やロボット支援手術の臨床導入・実施に注力してまいりました。

全国に先行して人口が減少し、高齢化が進むここ高知県だからこそ、前立腺がんをはじめとする泌尿器がん、さらには排尿機能の問題など、われわれ泌尿器科医が担い解決すべき課題は多いと考えます。甚だ微力ではございますが、優れた医療人を育成し、母校である高知大学、さらには泌尿器科学の発展を目指して、地域と世界を意識した教育・研究・診療に邁進していく所存です。今後ともなお一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

就任のご挨拶および病理診断科の設置について

病理診断科 科長　村上 一郎

平成28年4月1日、高知大学医学部附属病院の診療科に新たに病理診断科が設置され、科長を拝命しました。何卒よろしくお願いいたします。

従来、附属病院においては、中央診療施設に病理診断部が設置されていますが、診療科に病理診断科を加えて「病理説明外来」を担当させて頂く事となりました。病理診断担当:病理診断部、病理説明外来担当:病理診断科と言う区分けで業務を分担する形で進めて参ります。病理診断科開設により、

1）病理説明外来

患者さんは、病理診断を病理専門医から、直接聞く事ができ、病気に対する理解が深まり、治療に積極的になる事が期待されます。

2）セカンドオピニオン外来

他の施設で受けた病理診断について、改めて説明を受ける事ができます。

等のメリットがあると考えています。

外来診療を行う場所は総合診療部の1診（水曜日午後13:30～14:00）で、完全予約制です。スタッフは、私以外に副科長：弘井 誠（病理診断部部長）、医局長：倉林 睦（病理学講座准教授）、外来医長：長沼 誠二（病理学講座助教）、戸井 慎（病理診断部副部長）、降幡 睦夫（病理学講座教授）、他4名で総勢10人の病理医が対応する予定です。

病理説明外来では、癌患者さんに対する説明を中心に考えています。日本人の二人に一人は癌になり、三人に一人は癌で亡くなる時代ですので、全国で言えば、6000万人、高知県で言えば35万人が対象となります。癌の中でも、鳥取大学等における実際の経験から言えば、乳癌患者さんの病理説明外来に対するご希望が圧倒的に多い印象です。乳癌は、日本全体では年間6万人が発症すると推定されており、その数から単純に計算すると高知では、350人という事になります。350人の内、110人程度が当院にて手術がなされるので、その方々を中心に対応する事になると思われます。もちろん、乳癌患者さんに限らずお受け致しますので、よろしくお願いいたします。

病理診断科　**科長：村上 一郎**

◆外来診療日：水曜日午後（完全予約制）

問い合わせ先

病理診断部（内）23562、（外）088-880-2689

糖尿病センター・リウマチセンター・画像下治療（IVR）センターの開設について

高知大学医学部附属病院では、4月1日から新たに「糖尿病センター」「リウマチセンター」「画像下治療（IVR）センター」の3センターを開設しました。

総務企画課

各疾患には特殊性があり、専門医と専門スタッフによる治療やサポートの必要性がきわめて高く、これまでも専門外来として診療に当たっていましたが、センター化することで、多職種によるチーム医療をよりスムーズに行い、患者さんにより安全・安心で高度な医療を提供することが可能になりました。

「糖尿病センター」

総数が1000万人に達し、今や国民の10人に1人が発症するポピュラーな病気となっている糖尿病に対し、患者さん個々の状況に合わせた様々な治療法を、それぞれの領域の専門医らと連携しつつ多職種で対応しながら進めていきます。

糖尿病患者さんの数はきわめて多いため、毎月の診察・検査・投薬は地域の「かかりつけ医」に担当していただき、本センターでは初めて糖尿病と診断された方や治療困難な方について、患者さん個々の状況を把握しながら治療方針を決定し、「かかりつけ医」に情報をお返しします。

「リウマチセンター」

近年、生物学的製剤が導入され、関節リウマチの薬物治療が以前とは全く異なるものとなったことを受けて、関節リウマチを早期に診断し、適切な抗リウマチ薬や生物学的製剤を使用することで速やかな寛解を目指す専門のセンターとなります。

一方で、薬物治療が進歩した現在でも、手術治療を必要とする患者さんは少なくありません。そうした患者さんに対し、内科と整形外科が連携をとり、生物学的製剤使用下での手術の有効性と安全性について経過を観察しつつ、集学的な診療を行います。関節リウマチと鑑別を要する他のリウマチ性疾患・関節疾患についても、診断・治療に難渋する際に紹介いただければ、診療科を越えた幅広い視点から診療に当たります。

「画像下治療（IVR）センター」

画像診断に精通したIVR専門医と放射線技師・看護師らがチームとなり、安全で高精度なIVR手技を行います。小児から高齢者まで、頭部、心臓を除くすべての臓器が対象です。対象疾患はがん、脈管疾患、炎症性疾患から血管腫・血管奇形、救急にいたるまで多岐にわたり、これらの疾患の診断・治療過程において、様々な目的でIVRが行われます。

本センターでは、関連する診療科・部門・部署と連携しながら、IVR診療に取り組んでいきます。また、救急IVRに迅速に対応できるよう、24時間オンコール体制を整備しています。

3月24日（木）に記者発表を行い、病院長からは「各センターでは、診療科の枠を超え、医療スタッフが連携したチーム医療を展開していく。患者さんにとっての利便性を向上させ、安全かつ最先端の治療を提供していきたい」との発言がありました。

糖尿病センター

外来診療日：火、木

◆センター長
内分泌・糖尿病内科 教授　**藤本 新平**

◆副センター長
眼科 教授　**福島 敦樹**
腎臓・膠原病内科 教授　**寺田 典生**

問い合わせ先
内分泌代謝・腎臓内科医局　内:22662
TEL:088-880-2343

リウマチセンター

外来診療日：火、木

◆センター長
腎臓・膠原病内科 教授　**寺田 典生**

◆副センター長
整形外科 教授　**池内 昌彦**

問い合わせ先
内分泌代謝・腎臓内科医局　内:22662
TEL:088-880-2343

画像下治療（IVR）センター

外来診療日:月曜日午前、金曜日午前（※予約制）

◆センター長
放射線科 教授　**山上 卓士**

問い合わせ先
放射線科医局　内:22722
TEL:088-888-2367

医局長・外来医長・病棟医長一覧

平成28年4月1日現在
◎は主任科長

診療科	科長	副科長	医局長	外来医長	病棟医長
内科	西原　利治	岩﨑　信二	岩﨑　信二	耕崎　拓大	廣瀬　享
	寺田　典生	藤本　新平	西山　充	髙田　浩史	井上　紘輔
	横山　彰仁	窪田　哲也	窪田　哲也	谷口亜裕子	大西　広志
	◎北岡　裕章	山﨑　直仁	山﨑　直仁	久保　亨	谷岡　克敏
	古谷　博和		大崎　康史	大崎　康史	森田　ゆかり
小児科	藤枝　幹也	久川　浩章	久川　浩章	堂野　純孝	大石　拓
精神科	森信　繁	下寺　信次	上村　直人	永野　志歩	赤松　正規
皮膚科	佐野　栄紀	中島喜美子	大湖健太郎	藤岡　愛	志賀　建夫
放射線科	山上　卓士	刈谷　真爾	刈谷　真爾	小林　加奈	山西　伴明
外科	花﨑　和弘	杉本　健樹	北川　博之	沖　豊和	宗景　匡哉
	◎渡橋　和政	西森　秀明	穴山　貴嗣	福冨　敬	西森　秀明
形成外科	栗山　元根	吉田　行貴	吉田　行貴	吉田　行貴	吉田　行貴
麻酔科	横山　正尚	山下　幸一	北岡　智子	河野　崇	北岡　智子
産科婦人科	前田　長正	池上　信夫	泉谷　知明	谷口　佳代	池上　信夫
整形外科	池内　昌彦	武政　龍一	武政　龍一	川﨑　元敬	喜安　克仁
眼科	福島　敦樹	福田　憲	角　環	松下恵理子	西内　貴史
耳鼻咽喉科	兵頭　政光	小林　泰輔	小林　泰輔	小森　正博	松本　宗一
脳神経外科	上羽　哲也	福井　直樹	福井　直樹	中居　永一	上羽　佑亮
泌尿器科	井上　啓史		蘆田　真吾	山﨑　一郎	深田　聡
歯科口腔外科	山本　哲也	北村　直也	笹部　衣里	北村　直也	吉澤　泰昌
総合診療部			武内　世生	小松　直樹	北村　聡子
病理診断科	村上　一郎	弘井　誠	倉林　睦	長沼　誠二	

	部門名	部門長	副部門長
内科	胃腸内科部門	西原　利治	岡本　宣人
	肝・胆膵内科部門	岩﨑　信二	小野　正文
	内分泌・糖尿病内科部門	藤本　新平	西山　充
	腎臓・膠原病内科部門	寺田　典生	堀野　太郎
	血液内科部門	砥谷　和人	谷口亜裕子
	呼吸器・感染症内科部門	横山　彰仁	窪田　哲也
	老年病科部門	北岡　裕章	山﨑　直仁
	循環器内科部門	北岡　裕章	山﨑　直仁
	神経内科部門	古谷　博和	大崎　康史

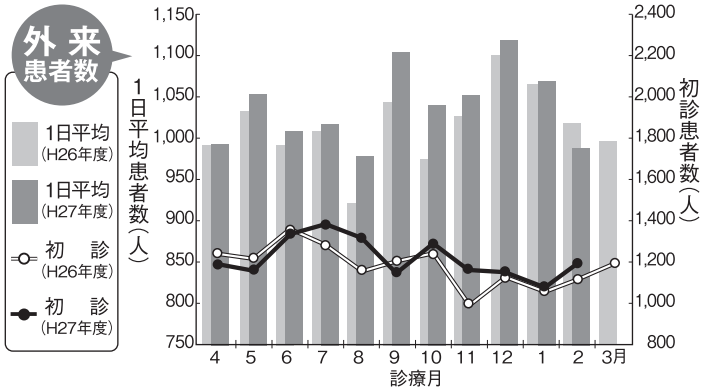
	部門名	部門長	副部門長
外科	消化器外科部門	花﨑　和弘	並川　努
	心臓血管外科部門	渡橋　和政	西森　秀明
	呼吸器外科部門	穴山　貴嗣	岡田　浩晋
	乳腺・内分泌外科部門	杉本　健樹	沖　豊和
	小児外科部門	大畠　雅之	坂本　浩一
	臨床腫瘍・内視鏡外科部門	小林　道也	岡本　健

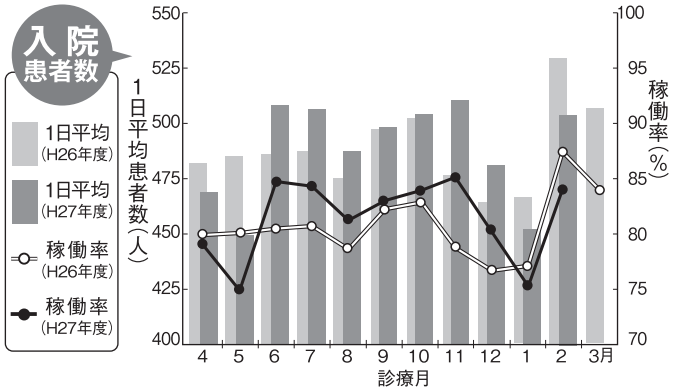
平成28年度 病院ニュース編集委員会 委員名簿

［任期:平成28年4月1日～平成29年3月31日］

委員長	森信　繁	（精神科 科長）	副委員長	井上　啓史（泌尿器科 科長）
委員	西山　充	（内分泌代謝・腎臓内科）	若狭　郁子	（看護部 副看護部長）
	北村　直也	（歯科口腔外科）	岩田　豊志	（総務企画課 課長補佐）
	岡﨑　瑞穂	（検査部）	曽我　憲幸	（医事課　専門員）

診療状況





編集後記

新年度初の病院ニュース発刊となりました。皆様の部署でも新規採用職員や異動による新しい仲間を迎えられたことと思います。毎年のことですが、新しい職員を迎えることによって部署に新しい空気感が生まれ、それがリフレッシュ効果へとつながっていくことを感じます。

さて、新病棟の稼働が始まってから早くも1年が過ぎました。当初は第一病棟と第二病棟をつなぐ廊下が非常に長いように感じていたのですが、最近は慣れのためか、そのようなこともなくなってきました。廊下を歩きながら空を眺めて天候を確認したり、展示されている写真パネルを見たりしているうちに目的の病棟に到着している、といった感じになってきています。

今年度は5月に病棟編成が予定されており、再び新しい職員や設備を受け入れ適応していく時期を迎えることになります。新しさを受け入れる柔軟性や互いを理解しあう姿勢で新しい局面を乗り切っていきたいと思います。

（文責 ： 多田 邦子）